

FD講演会

学修成果の可視化は誰のため？

—授業アンケートをやめた大阪府立大学が取り組んでいること—

教育推進支援センター FD・AL 部門 境 昌宏 もの創造系領域

これまでのFD講演会では、AL（アクティブラーニング）の話題が多かった。そこで今回は趣向を変えて、講師に大阪府立大学 高等教育推進機構 高等教育開発センターの星野聡孝（ほしのあきたか）先生をお招きし、「学修成果の可視化は誰のため？—授業アンケートをやめた大阪府立大学が取り組んでいること—」と題してご講演いただいた。講演日は2020年1月23日であり、この時期はご存知のように、卒論・修論研究の追い込み時期でもある。このため、開催前は人が集まるのだろうかと気を揉んでいたが、いざ蓋を開けてみると、その心配は杞憂に終わった。卒論・修論指導で忙しいはずの教員の方々だけでなく、事務職員の方、さらには学生の参加もあり、総勢約50名強の盛況な講演会となった。

星野先生に今回の講演をお願いする際、「参加者が少しでも多くなるように、題目に惹句を入れていただけないでしょうか」とお願いしたところ、上に



図1 大阪府立大 星野先生によるFD講演会
(2020年1月23日、N306講義室にて)

あるように「授業アンケートをやめた…」というインパクトある惹句をご提案いただいた。この題目が皆様の耳目を集めたのであれば、主催者冥利につきる。これだけ多くの参加者が集まったことを考えると、皆様、授業アンケートに対してあまり良いイメージを持っておられないものと推察する。本学でも每期（あるいは毎クォーター）ごとに、アンケート用紙が事務室の棚の各教員のところに置かれ、最終週の貴重な授業時間を費やしてアンケート用紙を学生に配布し、手書きで学生にほぼ強制的にアンケートを行う作業がルーティーン化している。

授業アンケートについては、本学だけでなく、他大学でも頭を悩ます問題であることはよく耳にする。教員側は「学生になぜ私の崇高な(?)授業を評価されなければならないんだ」、「シラバスも読んでいない寝てる学生に評価されたくない」、「私らが学生の頃にはこんな授業アンケートなどなかった」など不満続出、学生側も「このアンケートに答えたからといって授業が良くなるわけでもない」、「仮に授業改善が行われたとしても自分はもうこの授業を受けないから関係ない」、「課題が多いからこの先生の授業は低評価にしてやれ（←これはさすがにないと信じたいですが…）」など、教員側、学生側にとってwin-winならぬ、lose-loseのシステムと化しているのが本学含め多くの大学での現状ではないだろうか。

「この面倒な(?)授業アンケートをやめることができればどんなにいいだろうか」と思われた教職員の

方が少なからずいるはず。今回のFD講演会のサブタイトルをご覧になった方はきっとこう思われたに違いない。「授業アンケートをやめたって？では一体、大阪府立大ではどうやって授業評価や改善を行っているの？」あるいは、「授業アンケートをやめたということは、大阪府立大は授業改善することをあきらめてしまったの？」と。私も星野先生から最初にこの話をいただいたとき、正直信じられず、当日の講演での種明かしが楽しみであった。結論から言うと、サブタイトルに嘘はなく、確かに大阪府立大は授業アンケートを廃止していた。かといって、授業評価や改善をやめたわけではなかった。一体、大阪府立大が取った秘策は、気になる方は（気にならない方もぜひ）この先をお読みください。

そもそも、今回のFD講演会の題目にある「学修成果の可視化」とは具体的には何を指すのか。この言葉は2014年に文科省が設定した大学教育再生加速プログラム（通称、AP事業）のテーマ名の一つである。AP事業は、テーマⅠからⅤまで用意されており、そのうちのテーマⅡが「学修成果の可視化」となっている。ちなみに、残りのテーマは、Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴの順にそれぞれ、「アクティブ・ラーニング」、「入試改革・高大接続」、「長期学外学修プログラム（ギャップイヤー）」、「卒業時における質保証の取組」であり、テーマごとに申請書を提出し、採択されると国から補助金がもらえる。大阪府立大は、テーマⅠ・Ⅱの複合型で採択されており、今回の講演は、テーマⅡの学修成果の可視化で星野先生にお願いした。

講演では、学修成果の可視化を「誰のために、何のために行うのか」、また「何をどのように可視化するのか」という問題提起がなされた。大阪府立大でも当初は授業アンケートを行っていたが、先に述べたような問題、すなわち、教員は学生から評価されることへの抵抗感があること、学生はアンケートに答えたところでメリットがほとんど得られないことなどから、授業アンケートをやめるという大胆な方策が取られた。授業アンケートの代わりに大阪府立大が採用したのが「eポートフォリオ」である。従来の授業アンケートとeポートフォリオとの違いを以下のようにまとめられていた。

| 授業アンケート | eポートフォリオ |
|-----------|--------------|
| 学生による授業評価 | 学生による学びの自己評価 |
| 回答残らない | 回答蓄積・閲覧可能 |
| 教員のため | 学生自身のため |

本学でもCampus Squareにポートフォリオの機能があるが、チューター面談の記録を残すくらいで本来のポートフォリオの機能を果たしていないのが

現状である。大阪府立大のeポートフォリオは2012年度から導入されており、学生自身が学習目標設定を行い、学習のふり返しを行うこともできるようになっている。この「ふり返し」をポートフォリオ上で行うことができるのが最大の特徴となっている。授業が終了した時点での「授業ふり返し」では、学びのプロセスと達成度の自己評価を6段階で記録、授業で何を身に付けたか、教員へのコメント、授業の良かった点、後輩学生へのメッセージなどが入力できるようになっている。また、受講科目の成績分布も学生に公開され、自分がどのくらいの順位にいるのかを学生自身で把握することができる。星野先生いわく、この成績分布の表示は、学生の学習意欲を高めるのに効果的とのことであった。

ふり返しは、授業終了時のふり返しだけでなく、半期終了した時点で全体のふり返しを行う「半期ふり返し」もある。学生自身が半期前に立てた半期学習目標をどれだけ達成できたか、また大学が目指す学修成果をどれだけ身に付けたかをeポートフォリオで記録するようになっている。半期ごとに受講した科目全体の成績分布も表示され、さらには半期GPAの経年変化も見ることができるようになっている。以上のように「ふり返し」に力を入れることで、学生自身が学習の自己改善を行い、能動的、自律的に学んでいけるようこのポートフォリオは設計されている。

学生のために設計されたeポートフォリオであるが、教員側も自身の授業改善に役立つように、「自分が担当している授業科目間の比較」、「成績分布、学習成果満足度、授業外学習時間の年度ごとのデータ」、「部局平均との比較」などがeポートフォリオ上で見られるようになっている。具体例として、星野先生ご自身が担当されている物理学実験の学習成果満足度の2012年度から2016年度のデータを提示され、2015年のみ満足度が低くなった原因として、新しい実験テーマを入れたためと分析されていた。このように、データの蓄積と比較により、様々な気づきを得ることができることもeポートフォリオの利点であると説明されていた。

講演の最後に、学修成果の可視化は教員ではなく学生のために行うべきであること、最終的な成果の可視化だけでなく、成果獲得のプロセス、4年間の学びのプロセスなどその過程についても可視化を行い、多面的に評価することの重要性を強調されていた。本学で同様のシステムをすぐに導入することは難しいかもしれないが、学修成果の可視化を具体的にどのように行えばよいかを知ることができる非常に有意義な講演であった。

北海道大学高等教育推進機構 高等教育研修センター 主催

「学生はオンライン授業をどう受け止めているのか」

2020年7月9日 Zoomセミナー

教育推進支援センター FD・AL部門 小野 真嗣 ひと文化系領域

現在国内外の多くの大学において、コロナ禍による対応でオンライン授業が主体となっています。その状況の中で、教員の授業配信に関する技能講習は先行して行われましたが、(本執筆時点で)前期授業の中盤に差し掛かる時期となり、一方の受講している学生がオンライン授業をいったいどのように受け止めているのかという点がクローズアップされてきました。これまでその点では議論が行われていないこともあり、学生視点に立った状況理解のセミナーとして初の試みとされ、実際受講してみて大変有意義なものとなりました。

教員のみならず学生にとってもほぼ全員が初めてのオンライン授業となりますが、どのような苦労を抱えているのか、学生の1週間あたりの行動スケジュールをベースに、学生が抱くオンライン授業に対する心境や本音の他、彼ら自身が抱える課題やその対応に対する工夫などについて、Zoomミーティング形式で学生登壇によるセミナーでした。講師はFD研修で著名な北大高等教育研修センターの山本堅一特任准教授で、登壇学生は山本先生の授業を受講する6名の学生(いずれも北大生)でした。セミナーは、冒頭で学生1名あたり3分の持ち時間で、学生がどのようにオンライン授業を受け止めているのかについて、正直に感想や印象を述べ、その間、Slido (<https://www.sli.do>) と呼ばれる質疑応答や投票をリアルタイムに行えるウェブサービスを併用しながら、研修参加教員からの質問を受け付け、各学生が回答する形式でした。

表1は、筆者なりに各発表の要旨をまとめたものであり、括弧内は筆者自身の解釈による補足、感想・印象を述べたものです。本学にも共通の問題点の他、問題とはなっていない点、他大学では解決ができつつも本学で未だ解決できていない課題点等に分け、学生が述べた点を整理したものです。

本学においても、恐らくは教員個人のほか、学科やコース単位などで学生の動向について調査しているかもしれませんが、非常時として行われている現在のオンライン授業において、学生のオンライン授業に対する受け止め方を率直に伺うことができた大

変良い機会となりました。本稿を通じて本学教員にも情報共有できれば幸いです。

表1

| 課題分類 | 登壇した6名の学生からの意見 |
|----------------------|---|
| 本学でも共通の課題と考えられる事項 | <ul style="list-style-type: none"> ・科目担当教員とコミュニケーションが取りにくい(口頭で簡単に言える部分が、画面や文字を介すと敬語等について余計に気を使わなければならない。また本当に尋ねたい部分を示しにくく、期待した回答が得られにくい。) ・ただ課題をこなしているだけで作業感が否めない(指示された内容を周りの協力なく一人孤独に取り組み、また取り組んだ内容についてもフィードバックが薄い。学習意欲がわいてこない。) ・課題提出型であれば、提出したのものにはこまめにフィードバックをしてほしい |
| 本学では問題とはなっていない事項 | <ul style="list-style-type: none"> ・出席を取っているのかどうか学生からはわからない(本学ではMoodleの出欠機能で管理されている。) ・授業毎にシステムやアプリが異なると煩雑となる(本学ではライブ配信でZoom、教材配信でMoodle、大容量ストレージでOneDriveと統一的な整備が行われている。学生発表では北大ではZoom、Webex、Teams等教員によって異なるケースもあるようだ。) ・PDFのレジュメだけ載せた授業は理解ができない(本学ではライブ授業、オンデマンド授業ともに、教員の音声による口頭説明が配信されている。) |
| 本学では今後解決すべき内容と思われる事項 | <ul style="list-style-type: none"> ・ライブ授業だけのオンライン授業はあまり学習につながらない。オンデマンドの併用が必要。できればYouTube動画が都合がよい。 |
| その他特記事項 | <ul style="list-style-type: none"> ・対面授業とオンライン授業の比較で、課題の総量は変わっていないものの、課題をこなす難易度が上がっている(学生が相談しながら共同で取り組めない。一つの課題あたりに費やす時間が以前より多くなった。) ・自由に対面で(ライブで)質問できるオフィスアワーのような時間などを設けてほしい(授業外の質問対応ではこれまでの教員室への訪問が叶わず、メール等の文字によるものになり、話して伝えるという手段がなくなり不便を感じている。) ・学生同士のつながりを確保できる方法がほしい(ディスカッションを多く行う授業において、対面授業では授業内外で学生間の仲を向上させていく効果もあり、相手の考えも考慮しつつ空気を読みながら議論ができたが、オンライン授業では実際の対面経験の無い他の受講生と議論の機会を多く作られても、踏み込んだ質問をしていいかどうかなど空気が読みづらく、うわべだけの議論になってしまっているかもしれない、という補足も聞こえた。) ・孤独感が否めず、精神的に病んでしまった人もいる。 |
| オンライン授業の効果 | <ul style="list-style-type: none"> ・オンデマンド提供なら日中の時間を自由に使える ・通学の時間がかからず快適 ・動画を置いてくれるとリピーターや倍速で聴ける ・学習資料がデータ化され、場所を問わず作業が可能 |

学生はオンライン授業をどう受け止めているのか

教職員対象

2020

7/9

13:00~14:00

7/16

17:00~18:00

参加申込

詳しくは申込

ページをご覧ください

QRコード



会場 Zoomセミナーとなります(URLは申込書にお知らせします) 講師 山本 堅一 (北海道大学高等教育推進機構特任准教授)

「遠隔授業を問い直す」

教育推進支援センター FD・AL部門 安居 光國 しくみ解明系領域

全教員が最大限の努力をして遠隔授業に取り組んでおられることでしょう。改めて遠隔授業を問い直して改善のヒントを見つけましょう。「遠隔授業」とは教室で行われる面接授業（対面授業）に対し、インターネット等メディアを通して受けられる授業のことである。そして、1. 会議システムなどを利用した同時双方向型、2. 配信方式のオンデマンド型（非同時）に分けられる。

【文科省基準】

教員らは令和2年度前期授業の対応に追われたが、文部科学省は約20年前の平成10年および13年に大学設置基準の一部を改正しており、その中で遠隔授業を一定条件が満たせば面接授業に相当する授業として認めている。要件は「毎回の授業の実施に当たって設問解答等による指導を併せて行うものであって、かつ、当該授業に関する学生の意見の交換の機会が確保されているもので、大学において、面接授業に相当する教育効果を有すると認めたもの」である。つまり、新型コロナ対策で緊急避難的に変更されたことはわずかで、やっと大学が遠隔授業に向き合ったのである。また4月以降の文科省のQ&Aを見ると好ましくない授業例は、課題を与えるだけ、動画教材に置き換えるだけ、質疑は受け付けるが教科書を自分で読むだけ、スライド等教材の配布だけ、質問の機会がない等である。つまり面接授業のレベル以下のものは認められず、「新型コロナだから・・・」という弁明は限られている。

【遠隔授業の魅力】

多くの大学で令和2年度前期に取られた学生アンケートには「通学時間の節約」「オンデマンドは好

きな時間に繰り返し学修ができる」「自分のペースでの学修」が異口同音に語られている。2001年からオンデマンド授業を取り入れている早稲田大学の学生用の授業手引きには、「時間割や受講場所による拘束がありません。反面、時間と空間の拘束が緩やかなため、各受講生が自ら講義に参加する意欲と自主的なスケジュール管理が不可欠となります」と書かれており、学生にタイムマネジメントの重要性を忘れなく伝えている。

教員の声には「授業準備に時間がかかる」が多い。それは授業設計をしっかりとしなければならないことに気付いたからである。各回の授業目標を明確にし、飽きさせない時間配分、クイズや小テストの配置、学生レスポンスの掴み方、反転授業の活用、レポートの添削やフィードバック、質問対応など詳細な設計あってこそ教育効果が生まれる。一方で、授業には抜けた部分やあそびの部分が必要だ。

学生と教員の関係性に変化が生じた。遠隔授業では、受講生は他の受講生がほとんど目に入らず画面を独り占め感覚になることもあり、インプット型の授業では効果は高くなる。

【遠隔授業の裏側】

オンライン授業の先進国の欧米からは変化も報告されている。教員は意外にディスカッション、プレゼンテーションなどインタラクティブな授業もオンラインでできることに満足しているが、学生たちには不満と懸念が高まってきている。彼らがもっとも残念がっていることは「共有する空気感」を味わえないことである。論理的なディスカッションの先にある世界に教育を期待するからなのだろう。

編集後記

第35号FDだよりをお届けします。令和元年度教育推進支援センターFD・AL部門では、大阪府立大学の星野聡孝先生に「学修成果の可視化は誰のため？ - 授業アンケートをやめた大阪府立大学が取り組んでいること -」についてご講演頂きました。参加できなかった先生方におかれましても本FDだよりをご覧いただければと存じます。また令和2年度のFDワークショップでは「ウイズコロナにおけるオンライン授業の新しい可能性を探る - 対面指導と遠隔指導のハイブリッド化による新しい学びやALの展開に備える -」をテーマとしたワークショップを開催予定でした。また、本年度は新型コロナ禍のため、FDワークショップとしては初の試みとなるオンラインによる開催となり、その状況は次号のFDだよりにてご報告致します。引き続き、教員の皆様のご参加とご協力をお願い致します。(H.N)